

「未来の酪農に繋がるもの」

神奈川県立相原高等学校

畜産科学科 2年 田代 夏帆

日本の食文化に合った、オリジナルの乳製品を作ってみたい。これが、私の夢です。私がこの夢を抱くまでには、さまざまな出会いや体験がありました。

元々動物が大好きだった私は、畜産科学科に入学し、畜産部の牛プロジェクトに入部しました。そこで毎日休みなく牛の世話をし、搾乳をしていく内に、ただのどかに北海道の広大な牧場で草を食んでいるホルスタインのイメージがさま変わりしました。そして、ヨーロッパなどの外国では、古くから酪農が行われていたということぐらいしか、酪農について知らなかったことに気づき、歴史を調べてみることにしました。すると、下記のようなことが分かりました。

十三～十四世紀頃、オランダを中心として酪農が開始された。十八世紀後半、産業革命に続いて近代酪農が飛躍的に発展した。ニュージーランドやオーストラリアは、二十世紀に入ってから牛乳生産が急速に伸びた。主要酪農国の特徴を比較すると、オランダは、乳牛の代表品種ホルスタインの原産国として名高く、エダムチーズやゴダチーズなどの著名なチーズを生産している。デンマークは農業協同組合組織が発達し、牛乳・乳製品の生産や輸出で知られ、酪農副産物を利用しての養豚業が発達している。スイスは、アルプスへの放牧による高原酪農をしている。オーストラリアの酪農家は、大部分が牛舎を持たずに、ミルクパーラーという機械で搾乳をしている。また、世界の酪農は、紀元前三千年頃に始まっているということにも驚きました。

一方、日本で牛乳が初めて飲用されたのは七世紀頃。私が想像していたよりずいぶん早いですが、それから明治の中頃になるまでは、主に医薬としての利用が中心だったそうです。大正時代に入り、やっと日本でも、北海道で雪印乳業の母体となった北海道販売組合連合会が創設され、バター製造事業が始まりました。戦後、食生活の欧風化に伴うパン食と並行して、牛乳の消費が伸び、酪農は隆盛しました。多頭化による経営の合理化が進められた結果、全国平均で飼養家当り搾乳牛は、フランス並みの頭数規模となり、北海道の牧野面積は、オランダのレベルに近いそうです。また、他の都府県は極端に少なく、そのため購入飼料費が多額になり、経営が苦しくなっています。他には、酪農の酪という字は、乳を乳酸発酵させた飲料を意味しているということを知りました。

調べ進めている内に、酪農のさかんな国はまず、乳製品を必要とする食文化があるということ、牛を放牧できる北海道のような土地がたくさんあるということ、それぞれの国で、特徴のある酪農が行われているということが分かってきました。そして今、私達は牛プロジェクトでの牛の世話を通して、座学では理解しきれない酪農の基本を勉強しているのだと実感しました。

そもそも、「日本の食文化に合った、オリジナルの乳製品を作りたい。」と思い始めた理由の一つに、地域の皆さんの「笑顔」がありました。日ごろから部活動の一環として、牛乳などの畜産物の販売を行っている私達にとって一番嬉しいのは、やはりなんと言っても、「これ美味しいわよね。」と言って買っていただく地域の方々の笑顔です。そしていつからか、この「笑顔」をもっと広げたい、と強く思うようになりました。そんな販売活動を通して、今まで消費者だった私は生産者の立場を考えるようになり、乳製品の開発に興味を持ちました。

いつも牛乳パックから飲んでいた牛乳は、たくさんの工程を経て、人と牛の努力によってできています。乳を出すために人工授精をし、無事出産できるように大切に育て、祈るように子牛の誕生を待つ。そして、時には嫌がる牛をなだめながら乳を搾る。細菌が繁殖しないように、ミルカーやバルククーラーなどの洗浄にも最新の注意を払わなければならない。このように、酪農というものは、飼料を作る人、乳牛を飼育し、乳を搾る人、その牛の健康を守る獣医さん、乳を加工する人、たくさんの人が繋がって成り立っているのだと思いました。

これからの日本の酪農をもっと発展させ、守っていくためには、農家だけでなく、国ぐるみで考えていかなければならないと思います。酪農王国として知られるデンマークが、まさにそうであるように。十九世紀後半のプロシアとの戦争で肥沃な土地を失ったデンマークは、穀物生産国としての生命線を絶たれたにも関わらず、国ぐるみで努力し、地味の悪い土地でも飼料作物が栽培可能であることに目を付け、酪農を発達させることができました。酪農のノウハウを教える高等学校を設立したり、大型機械の導入や乳製品の大量生産を一手に引き受けることもしました。また、飼料の輪作形態を取り入れたり、個人農ではできないことを、国ぐるみで行った結果がデンマークの酪農だと思います。

日本はといえば、そこまで真剣に国が農業のことを、酪農のことを考えているのでしょうか。今回、いまだ解決されていない口蹄疫についても、水際作戦の徹底しているオーストラリアが行っている、入国する全ての人々に対する厳重なチェックなどは、国が農業を守ろうとする姿勢の表れだと思います。

日本は工業国というお国柄もありますが、やはり、個人農ではできないことを、国全体として共有し、考えていかなければいけないと思いました。

そして、私達のように、興味を持って、勉強したいと思っている高校生・大学生に教育をし、専門性を身に付けることをし、未来の農業・酪農を考える人材を育てることが大切だと思います。私自身を含めたそのような人達が、日本の酪農を発展させていきたいです。それには、実際に体験するということがかかせない要素だと思います。

今夏、私は北海道の牧場で、十日間酪農体験をする予定でした。残念ながら口蹄疫の関係で中止になってしまいましたが、例えば修学旅行をかねて、デンマークやニュージーランドなど、

酪農の盛んな国へ行って、体験・勉強をしてみる事が大事だと考えます。

今私の力は微々たるものですが、伝統ある乳製品の作り方を勉強し、それを、土地の狭い日本の抱える問題点を考えて、日本にしかできない酪農に活かしたいです。そして、美味しいオリジナルの製品を自分達の育てた牛の乳から作っていきたいです。また、デンマークのように酪農副産物を、私の通っている高校の養豚にも利用してみたいと思っています。

まず、牛を愛情を持って育てることが何よりも大切な基本で、それが夢への第一歩だと考えています。そして、顧問の先生や牛乳を殺菌・ビン詰めしてくださる業者の方、そして牛との出会いがあったように、これからもたくさんの出会いが待っていると思うので、その一つひとつを大切にしていきたいです。
